

2021/04/18

ヨハネの福音書 講解メッセージ④⑥

『主はぶどうの木』 ヨハネ 15:1-15:8

■実を結ばないものは支えられる

「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。」(ヨハネ 15:1-2)

私は小学生の時、この御言葉を目にして衝撃を受けました。神の言葉を実行できない自分
は取り除かれてしまうかもしれないと思ったからです。その後聖書を学ぶ中で、それは誤解
であると気づきましたが、今もこれを誤解しているクリスチャンは大勢います。しかし、一
度神を信じた者が救いから取り除かれるようなことは決してありません。

ここで「取り除き」と訳されている「アイロー」は、辞書によると「持ち上げる、かつぐ、
支える」が主な意味であり、そこから転じて「取り除く」という意味があります。そもそも
この言葉の本来の意味は、「移動する、下から上に持ち上げる」というもので、「実を結ばな
ければ、私が何とかして支えてあげますよ」と訳すことも、「実を結ばなければ、私があなた
を他の場所に移動させますよ」と訳すことも可能です。では、イエス様は、どのような意味
で言われたのでしょうか。

それは、「ぶどうの木」というたとえに意味があります。当時のイスラエルにおけるぶどう
栽培は、日本のように棚を作るのではなく、地面にそのまま枝を這わせて栽培されていまし
た。そこで、実を結ばない枝はY字の支柱を使って持ち上げ、実を結ぶようにさせたのです。

このような誤解が生まれるのは、私たちには「罪には罰」という固定概念があるからです。
そのため、実を結ばないと、神は怒って枝を取り除くのだと思ってしまったのです。しかし、
イエス様はすでに次のように語っておられます。

「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさば
きません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからで
す。」(ヨハネ 12:47)

「実を結ばなくてもさばかない」、これが、イエス様が言われた基本姿勢です。なぜなら、
イエス様は「世をさばくためではなく、世を救うため」に来られたからです。この「救う」と
いう言葉は、「ソーザー」という言葉で、聖書では「いやす」とも訳されています。つまり、
「イエス様は私たちがいやすために来られた」ということで、私たちは病気の状態だから「い
やす」と言っておられるのです。

このことがわかれば、「アイロー」は、「実を結ばなければなんとかしてくれる」という意

味で使われていたことがわかります。

このように、たとえ話を解釈するうえで重要なことは、「神が何と言っているか」という物差しです。その物差しで解釈しない限り、正しく理解することはできません。

「さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです」（ヨハネ 16:11）とあるとおり、イエス様のさばきは、悪魔あるいは死という、私たちを否定する力に対するものであって、人に対してはさばく気などまったくありません。神は、私たちをいやすことしか考えておられないのです。

■あなたはきよい

「あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。」
(ヨハネ 15:3)

イエス様は、私たちを「すでにきよい」と言っておられます。きよいものを取り除く必要はありませんから、ここから考えても、「取り除かれる」という訳が誤りであることがわかります。

さて、「きよい」とは、死からいのちに移されているということです。つまり、あなたはすでに永遠のいのちを持っています。人を否定する最大のものは死です。だから、永遠のいのちを持っているということは、何物にも否定されない、あなたを否定するものはないということになります。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28)

ギリシャ語の原文では「与えます」は現在形で、これから与えるのではなく、「今与えている」という意味です。永遠のいのちを持っていなければ、イエス・キリストを信じることはできません。ですから、信じている人はすでに永遠のいのちが与えられており、その救いは確定したものです。つまり、一度信じたなら、何があろうと滅びることはありません。

「イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」」
(ヨハネ 13:10)

この場にユダもいたため、「みながそうではない」と言っておられますが、イエス・キリストは、私たちを「きよい」、すなわち、「すでに死からいのちに移されている」と言っておられます。私たちはきよいものだから、イエス様は、私たちを苦しめている罪の汚れを洗い流すために、この地上に来てくださいました。イエス・キリストの十字架は、私たちを否定するものを否定したのです。

■わたしにとどまりなさい

「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」(ヨハネ 15:4-5)

神の言葉にとどまり、神の言葉を信じることで結ぶ実とは、「平安」です。信じることができれば平安になるのですが、私たちはなかなか信じることができません。それを、助け主が助けてくださるのです。私たちは、神という土台の上に生きています。つまり、人は単独で生きているわけではなく、生かされている存在なのです。

神のことばにとどまるならば、多く信じられるようになり、多くの平安を得ることができるようになります。

「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」

(ヨハネ 15:6)

「イエス・キリストにとどまらなければ、火に投げ込まれて燃えてしまう」とは、「とどまっているなら、平安の実を結ぶ」ことの対比であり、永遠のいのちが滅びるという意味ではありません。

人は何をもって「自分自身」というと、それは「自分」という「意識」です。私たちの中に永遠性という普遍的ないのち（魂）があり、体からの情報によって、その思いが確認されます。ところが、その「体」は、悪魔によって有限性になりました。つまり、人は永遠性と有限性の両方に支えられています。つまり、人は、永遠性に属すのと同時に、死（有限性）にも属している不安定な状態です。聖書における罪とは、悪の行為ではなく、この不安定な状態のことを言います。この不安定な状態によって、私たちは常にどっちつかずで苦しんでいるのです。この二つの状態を、聖書は、「御霊の思いと肉の思い」と言っています。

私たちが安定するためには、御霊の思いか肉の思い、どちらかに立って自分を保つしかありません。多く人は、神の思いを無視して、有限性（この世の名声や富）にとどまって精神を安定させようと試みますが、それらは必ず消えてなくなるものです。どんな富を手にしても、それは必ず人手に渡り、どんなに有名になっても、それは一時的なもので必ず忘れられる時が来ます。それが、「ほかの人に寄せ集められて消えてなくなってしまう」ということです。

ですからイエス・キリストは、平安を得るために、「有限性に根差すのではなく、永遠性に根差したものを目指しなさい」、「神の側に立つことを目指しなさい」、「私にとどまりなさい」

と言っておられるのです。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。」(ヨハネ 15:7-8)

私たちが神の思いにとどまることを選択しても、体が属している有限性に引っ張られるため、なかなかとどまり続けることができません。そこでイエス様は、信じている私たちに対して、「その信仰を使って、信じているものが正しいことを確認しなさい。」と勧めておられます。信じていることを実際に行ってみると、信仰が確かなものになります。あなたが神を信じるなら、実際にあなたの問題が解決されることを求めてごらんください、ということです。そうやって、神のことばにとどまることで、神のことばの確かさを知り、多くの平安という実が増し加わります。それが神の栄光につながるのです。

■神にとどまるとは

「神のことばを信じる」とは、「自分は良きものである」と、自分自身を肯定することです。実は、これが人間にとって最もつらいことなのです。私たちは、どうしても自分が良きものであるとは思えないからです。もしそれができるのであれば、人の言葉は気にならず、怒りを抱くことも、嫉妬をすることもあり得ません。しかし、実際の私たちは、自分は良きものだと思っただとしても、それは、人と比較したり以前の自分と比較したりして、少しはましだと思っただけに過ぎず、自分を肯定したわけではありません。

なぜ自分を肯定することがつらいのでしょうか。それは、自分が弱く罪深いことを知っているからです。どんなにがんばっても、私たちは人と比べて劣るものを持っています。そして、最終的には死ぬ存在です。どんなに自分を肯定する材料を差し出しても、結局は死がすべてを飲み込んでしまいます。パウロはそんな自分を見て、「私はなんとみじめな人間か。いったい誰が私を死の体から救ってくれるのか」と言っています。

本当に自分を肯定するということは、自分が握りしめているものを手放すということです。お金があれば安心、名誉、すなわち、人から認められれば安心だと思っている私たちに、あなたの価値はそんなものではない、もっと素晴らしいものだと、神様は言われます。その私たちのいのちを見えるつまらないものと一緒にするということは、自分を否定することと同じです。つまり、自分を肯定するとは、それらの見える価値を手放すことになるのです。放せば自由になるのですが、私たちは握っているものを放そうとしません。手放したくても、手放したその先には罪深い自分がいることを私たちは知っており、この世界には自分を肯定できるものがないからです。私たちは、自分がダメな者であることに慣れてしまい、この慣れた生活から離れたくはないのです。

その私たちに、唯一自分を肯定できる材料を用意してくださった方がイエス・キリストです。イエス・キリストは十字架によって、罪を洗い流し、死を滅ぼしてくださいました。イ

エス・キリストの十字架は、あなたをまるごと飲み込み、肯定しているのです。その方を受け入れることが、神にとどまるということです。神に肯定されている自分を受け入れるということ、これが神の言葉にとどまるということなのです。

「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:6-8)

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」(エペソ 2:14-16)

私たちがまだ否定されているとき、キリストは私たちのために死んでくださいました。つまり、キリストの十字架とは、私たちが否定するものを否定するものです。それが、「敵意を廃棄する」、つまり、否定を廃棄する、私たちに敵意を抱くものを取り除く、ということです。そして、罪人であるにもかかわらず、完全に私たちを受け入れ、神と私たちを一つにしてくださいました。

その神を、ただ受け入れる勇気を持つことが、神にとどまるということです。つらい作業ですが、それを勇気をもって実行することが信仰です。受容されないと思っている自分、否定されてばかり愛されない自分を、愛し受け入れてくださっている方がいる、その方を受け入れる勇気を持つことが信仰です。

自分を肯定するのはつらいことですが、それを飛躍して、あなたを肯定する神を受け入れ、自分自身を肯定するとき、あなたは平安の義を結ぶのです。もし、実を結ばなければ神は私たちに支えてくださいます。なぜなら、神はあなたの本当の姿を知っているからです。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ 2:10)

「神のさばき」とは、「あなたを否定するものをさばく」ことです。神様はあなたを受け入れておられます。しかし、私たちが本当にそれを受け入れるということは、自分が握っているものを手放すことを意味します。それは大変つらい作業ですが、自分が握りしめているものを手放し、神にとどまろうとするならば、必ず心に平安が増し加わるのです。